

児童生徒一人一人が今、主体的に活動できる授業づくり

田村典子・山口美栄子・星野英樹・中村くみ子・伊藤嘉亮・阿部大樹*,清水茂幸**

*岩手大学教育学部附属特別支援学校,**岩手大学教育学部

(平成30年3月2日受理)

1. はじめに

本校は、児童生徒が力を十分に発揮し、「主体的に活動する姿」を目指しており、学校教育目標(表-1)にはその願いが込められている。この学校教育目標は2つの部分からなり、本校が目指す教育の方向性と児童生徒の目指す姿が示されている。

本校の教育の目的は、「主体的に、そして、豊かに生きる人を育成」することであり、「現在及び将来の社会生活において」とし、日々の学校生活と卒業後の社会生活での実現を目指している。

そして、本校が目指す児童生徒像として6項目示し、教育の目標を具体的に掲げている。

そこで、この学校教育目標の達成に向けて、日々、児童生徒が力を十分に発揮できる授業を積み重ねることが必要であると考え、「児童生徒一人一人が今、主体的に活動できる授業づくり」に全校で取り組むことにした。

そのため、平成26～27年度には校内体制を示し、平成28～29年度には授業実践を重ね、全校での共

通理解と、校内体制の改善を図った。

本研究ではこの4年間の取り組みをまとめる。

表-1 学校教育目標

現在及び将来の社会生活において、主体的に、そして、豊かに生きる人を育成する。

- ・ やりがいをもって意欲的に活動する人
- ・ 自分の力で取り組む人
- ・ 自分の役割に進んで取り組む人
- ・ 精いっぱい活動し満足感・成就感をもつ人
- ・ 仲間と共に協力する人
- ・ 心身共に豊かに生きる人

2. 校内体制作り

(1) 「授業づくりの視点」の提示

平成26～27年度の研究では、児童生徒が日々の授業で主体的に活動できるように、「授業づくりの視点(表-2)」を示した。「授業づくりの視点」は単元を構成する5つの視点からなり、全校で一貫した授業になるように、授業づくりの手掛かりとして示した。そして、単元の計画、改善に活用できるようにした。

表-2 「授業づくりの視点」

授業づくりの視点と方向性	授業づくりの視点の具体的内容
①単元の設定 学部目標に基づいて目標を設定 どの児童生徒も目的をもち取り組める単元に	○児童生徒の実生活に結びついた単元 ○興味・関心や願いを取り入れた単元 ○活動の流れやつながりが明確な単元
②単元の計画 単元の目標に基づいた指導計画 中心になる活動を繰り返す計画に	○まとまりのある計画 ○繰り返すことで活動を積み重ねることができる計画 ○発展性のある計画
③活動内容 単元の計画を推進するための授業の展開 どの児童生徒も存分に活動できるように	○集団の中で、人と関わり、自分の役割を遂行できる活動内容 ○自分のもっている力を生かし、やりがいを感じられる活動内容 ○自分で考え、行動できる活動内容 ○達成感、充実感を得られる活動内容 ○自己選択・自己決定できる活動内容
④学習内容への支援 教材教具・場の設定・教師の働きかけ 分かって動き、十分に活動できるように	○児童生徒が自分でできる教材・教具 ○自分から活動できる教材・教具 ○十分に組み立てる活動量と時間 ○活動しやすい道具の配置、動線 ○児童生徒が自分でできるような教師間の連携(T-T)
⑤協働的活動への支援 児童生徒同士の関わりへの支援・教師との関わり 教師も共に活動しながら、共感的に支援できるように	○共に活動する友達に関心を向け、友達や教師と共に活動できるようにする。 ○教師は児童生徒と共に活動し、児童生徒の自分でできる状況をつくるような適切な関わりをする。

(2) 「授業づくりの構想」の確立

本校では、授業づくりに全校で取り組むために「授業づくりの構想」を示した(図-1)。この構想は、「授業づくりの視点」に基づき単元を計画、

実践、評価、改善する PDCA サイクルによる授業改善を行う流れを授業づくりとし、授業づくりを基盤に学校教育目標の達成に向けて取り組むものである。

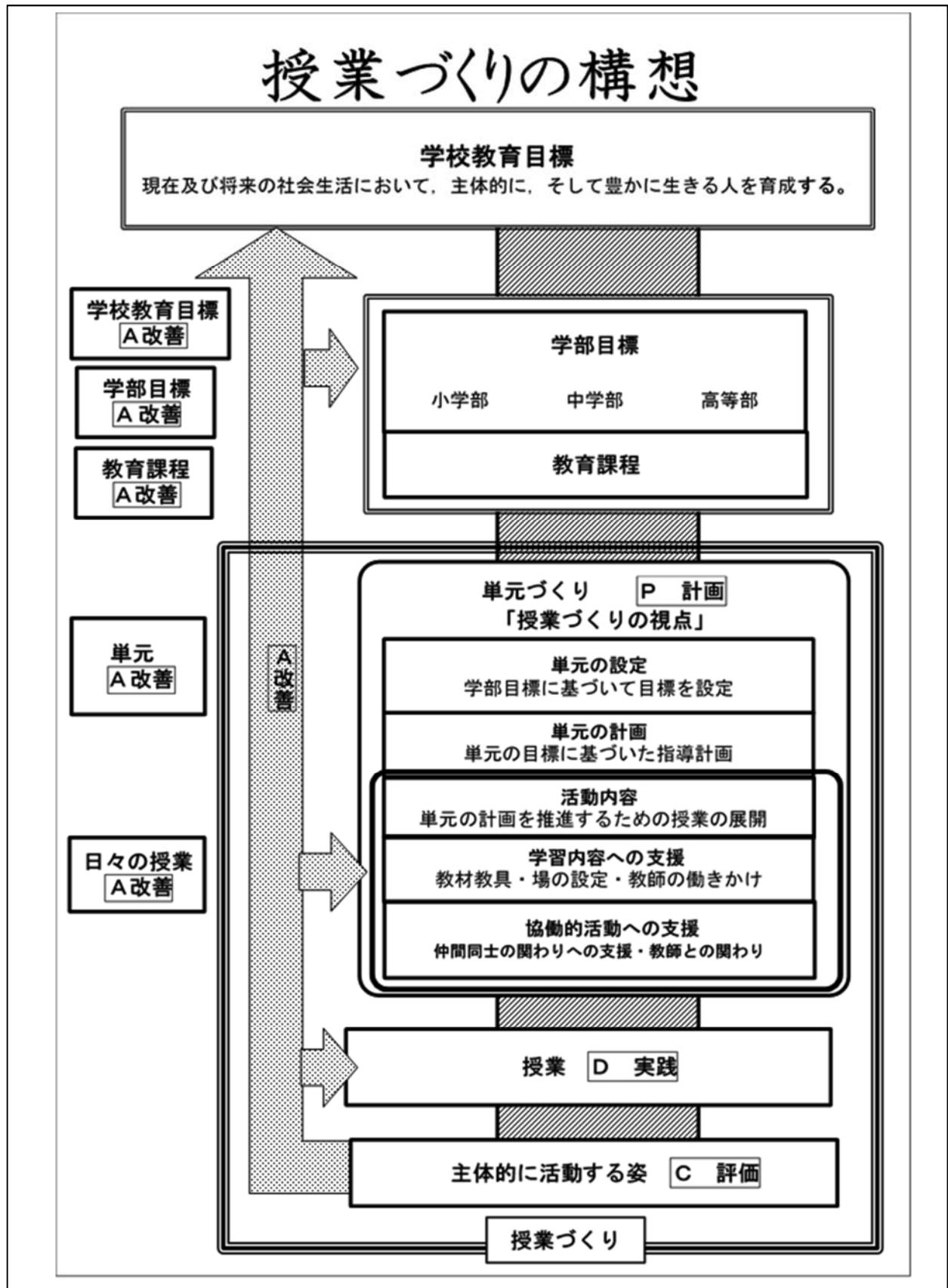


図-1 「授業づくりの構想」

(3) 「主体的に活動する姿」の共有

本校では、「主体的に活動する姿」を学校教育目標に示す目指す児童生徒像とし、全校で一貫性のある姿として捉えることができるようにした。

そして、各学部目標は、学校教育目標に基づき、生活年齢に応じた姿を示した。

単元目標や日々の授業の目標は、学部目標に基づき、目的に向かう姿を示した。単元や日々の授業では、児童生徒個々の目標を設定し、自分の力を発揮して活動する姿を目指すようにした。

このように、児童生徒個々の「主体的に活動する姿」は、学校教育目標を基にし、具体化の視点により条件付けをして目標を具体的に設定していくことで、全校で一貫性のある姿として捉えることができるようになっていく。

また、日々の授業では児童生徒個々の活動の様子（表－3）から、自分の力を発揮して活動する姿を見取り、学習評価とした。これは、観点別評価に符合するものであるが、それぞれの観点は相互に関係し合っていると捉えたため、児童生徒個々の活動の様子を活動に即して評価するようにした。

表－3 自分の力を発揮して活動する様子

<ul style="list-style-type: none"> ・自分で考え活動する様子 ・存分に活動する様子 ・自分で判断して活動する様子 ・単元の目標や自分の活動を理解して取り組む様子 ・自分の活動に首尾よく取り組む様子
--

このような学習評価から児童生徒個々の目標の達成の状況が分かり、授業改善につながった。

そのため、児童生徒の日々の授業の目標の達成の状況が分かる学習評価は、日々の授業の改善、単元の改善、教育課程や学部目標の改善にもつながっていくものである。

このような学校教育目標と児童生徒個々の目標のつながりを図－3に示した。



図－3 「主体的に活動する姿」のつながりの構想

3. 実践

(1) 指導案の活用

以上で述べてきたような授業づくりを実践するためには、「授業づくりの視点」に基づき単元を構成したり、「主体的に活動する姿」を単元や日々の授業の目標にしたりする必要がある。そこで、この授業づくりについて研究会で検討することにし、研究授業で作成する指導案の様式を以下の①～③について改善した。指導案の様式は図－2に示す。

① 「授業づくりの視点」で単元を構成する

学部目標に沿って単元を計画できるように、『Ⅱ 「授業づくりの視点」』に、「授業づくりの視点(表－2)」を基に単元の構成に関わる考え方を具体的に示した。

② 「主体的に活動する姿」を単元の目標、本時の目標とする

学校教育目標に基づく目標を設定できるように、「Ⅲ 単元の目標」「V-2 本時の目標」には「主体的に活動する姿」を示した。

③ 児童生徒の個に応じた「主体的に活動する姿」を目指す

自分の力を発揮できるように「Ⅳ 個人の目標

(2) 「評価シート」の活用

単元や日々の授業では、学校教育目標に基づき目標を設定し一貫性のある「主体的に活動する姿」を目指している。この目標が児童生徒個々に応じて設定できるように、「評価シート」を活用した。

「評価シート」には、児童生徒のもてる力を発揮している姿を目標として示すように、これまでの学習の様子を基に目標を設定した。そこで、目標にかかわる学習評価を基にした実態把握をした。そして、単元終了後に、自分の力を発揮している様子を見取り、活動に即した評価をした。

以上の内容で「評価シート（図-4）」を作成することで、児童生徒の個に応じた目標を設定することができ、授業づくりに生かしていくことができるようになった。

「評価シート」の特徴は以下のとおりである。

① 学習評価に基づく実態把握

これまでの学習の評価を基に、できること、得意なこと、興味・関心のあることや力を発揮できる支援などを記入する。

② 具体的な単元目標

「できた」、「分かった」ことを踏まえ、それを自分の力とし発揮している姿を目指す。実際の活動で目指す姿を具体的に示す。

③活動に即した評価

日々の取り組みの過程を大切に評価する。単元の目標達成に向けた取り組みの過程で発揮された力を具体的に把握し、次の単元、あるいは今後の学習の目標設定の手がかりにできるように記入する。



図-3 「評価シート」の例

4. 考察

(1) 成果

本研究では、学校教育目標の達成を全校で目指し、校内体制を整えるために取り組み、以下の成果があった。

- ①本校の単元や日々の授業では、児童生徒の「主体的に活動する姿」を目指すことが確認され、教育の方向性が明らかになった。
- ②「授業づくりの視点」を示したことで、全校で一貫した授業づくりをすることにつながった。
- ③指導案の様式の改善により、「主体的に活動する姿」や「授業づくりの視点」を授業実践につなげることができた。
- ④「授業づくりの視点」や「主体的に活動する姿」を生かした指導案を活用した授業研究会により、授業づくりについて、改善や全校での共通理解を図ることができた。
- ⑤学習評価を基に児童生徒個々の実態把握をしたことで、児童生徒のもてる力を生かして、個に応じた目標設定ができるようになった。
- ⑥評価シートの活用により、児童生徒の学習評価を基にした授業づくりができるようになった。

(2) 課題

- ①学校教育目標の達成を目指し、全校での一貫した授業づくりを継続していくためには、授業研究会を重ね、「主体的に活動する姿」や「授業づくりの視点」の改善や、共通理解を図っていく必要がある。
- ②児童生徒の「主体的に活動する姿」を積み重ねていけるように、「評価シート」の内容を生かし児童生徒の個に応じた学習ができるようにする。

5. まとめ

これまでの本校の研究を振り返ると、どの時代でも児童生徒の「主体的に活動する姿」について追究してきたが、この4年間の学校体制を整えるに当たっても、同様であった。大きな違いは、本研究では「主体的に活動する姿」を共通理解することを大切にしたことである。この共通理解に当たっては、「主体的に活動する姿」を定義することに

とどまらず、児童生徒一人一人の活動の様子について話し合いを重ね、確認し、時間を掛けて進めた。

そして、児童生徒一人一人の日々の活動の様子を丁寧に見取っていくことが、確実な方法であることを実感した。児童生徒の可能性は限りなく、計り知れないものがある。今後も授業づくりを追究し、児童生徒の生活を豊かにするための学びを探り、積み上げていきたい。

ところで、新学習指導要領では、子どもたちの新しい時代に必要となる資質・能力の育成を目指し、各学校におけるカリキュラムマネジメントの実現を目指している。この4年間の学校体制作りを基盤にして、本校もそれに迫っていきたい。

参考文献

- 1) 岩手大学教育学部附属特別支援学校(2007):「研究紀要第19集」
- 2) 岩手大学教育学部附属特別支援学校(2009):「研究紀要第20集」
- 3) 岩手大学教育学部附属特別支援学校(2011):「研究紀要第21集」
- 4) 岩手大学教育学部附属特別支援学校(2013):「研究紀要第22集」
- 5) 岩手大学教育学部附属特別支援学校(2014):「研究紀要第23集」
- 6) 名古屋恒彦著(2010):「特別支援教育 領域・教科を合わせた指導」のA B C～どの子にもやりがいと手ごたえのある本物の生活を～」
- 7) 太田俊己監修・千葉大学教育学部附属養護学校著(2004):「子ども主体・生活中心の教育シリーズ 支援案の書き方・個別の支援計画 ニーズに応える特別支援教育」
- 8) 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所(2015):「専門研究B知的障害教育における組織的・体系的な学習評価の推進を促す方策に関する研究—特別支援学校(知的障害)の実践事例を踏まえた検討を通じて—」